

記紀・風土記と魏志倭人伝等の整合性をはかる（第1報）

2021年4月24日

古代史研究家田中文也

1、はじめに

世界約200ヶ国の中で、日本の国だけが歴史がわかっていない。これを私は「国家的民族的課題」ととらえている。その象徴の一つが「邪馬台国論争」である。

今小論は、記紀・風土記と魏志倭人伝・史記等の関連性を検討し、その整合性をはかることを目標にまとめる。又、過去の論考との関連での間違いも整理したい。尚、これは第1報であり、研究が進展すれば、第2報第3報と充実させていく予定である。

2、3つの論争分野とその関係

日本の古代史には、大きく分けて次の3つの論争分野がある。①記紀や風土記・神賀詞などの日本国内の情報、②史記以降中国の国書に書かれている始皇帝と徐福の物語、③三国志東夷伝倭人の条の情報、の3つである。この3つの分野に、考古学・民俗学・自然科学などのおおよそ全ての学問分野が絡んでいる。

又、この3つの分野の確度は、①②③の順番となる。我々は、今この国の歴史の謎を解明しようとしているのであるから、当然科学的蓋然性はこの順番となる。問題は、一番確度の低い③の魏志倭人伝の情報をもとに長年邪馬台国論争が行われた結果、数百年経っても結論が出ないという惨憺たる状況が、依然として続いていることである。

したがって、この国の歴史の謎を解くためには、まずこの国のデータを基調に置きながら②と③のデータを援用するのが科学的検証態度と言える。この国の歴史の謎を解くのに外国の不正確な情報源を基盤にするという考えられないほどの過ちが、「国家的民族的課題」の解明を妨げてきた最大の要因と言える。

以下、①②③の情報の整合性をはかり、もって国家的民族的課題である日本国家創造期の解明に挑戦するものである。

3、記紀・風土記と倭人伝等の整合性をはかる

今回は、3つの分野の情報に共通する可能性がある以下の7点について、その整合性をはかっていきたい。

①倭国争乱・・・2つの戦争の記憶

魏志倭人伝には、「百余国あった倭国が争乱していた」と書かれている。一つは、卑弥呼が共立される前の男王の時代と、二つは卑弥呼が亡くなった後の男王の時代の2つである。

「その国は元々男子をもって王となす。とどまるところ70～80年。倭国乱れ相攻伐して・・・すなわち一女子を建てて王となす。名づけて卑弥呼といい、鬼道に使い良く衆

を感わす・・・」と書かれている。その時期は、「桓・霊の間」と記され、後漢朝の桓帝と霊帝の間という意味である。具体的には紀元後146年～189年の間である。(桓帝146年～167年、霊帝168年～189年)

倭人伝には、倭人の寿命について「その人の寿命は、或は100歳、或は80～90歳である」と書かれ、倭人が長寿であったと述べている。卑弥呼は、一般的に60余年在位に着き、80代で亡くなったと考えられている。亡くなった年は247～248年の間である。これを逆算すると(在位65年として)、182年から183年の間に在位についていることが分かる。霊帝の在位期間が168年～189年なので、整合性はある。この卑弥呼が在位に着く前の数十年間、つまり36年～37年の間の幾年かの間に、1回目の倭国争乱が起こっていたことになる。しかし、2回目の争乱の時期は分からない。卑弥呼の後の男王の在位期間が明らかになっていないのと、その後のトヨの在位期間も明らかになっていないからである。しかし、卑弥呼の没後に、争乱が起こったことは間違いないだろう。又、卑弥呼の後の男王の在位期間はそれほど長くはないであろう。卑弥呼の没後、国中が従わずに争乱が起きるのであるから、短命に終わり、ほどなくトヨに引き継がれたものと考えられる。「男王立てるも国中従わず相こもごも誅殺し・・・卑弥呼の宗女台与(トヨ)を立て、13歳にして王となり、国中遂に定まる。」と書かれている。

13歳で女王になっているトヨは(古代では男性は15歳、女性は13歳で成人とみなされた)、一般に宗女とあるので卑弥呼の娘と考えられているが、80代で亡くなる卑弥呼が70代後半から80代で出産したことになるので、医学的・生物学的には考えられない。

したがって、トヨは何らかの形で卑弥呼の血統を受け継いだものか、在位中に養女になったものであろう。この辺りの状況と年代が明らかにならなければ、やはり正確な年代が算出できない。しかし、前述の男王の在位が短いものとし卑弥呼の没後のことを考え、参照基準でほぼ同時代の桓帝と霊帝の平均在位年数21年の半分の約10年とすれば、トヨが女王になったのは257年～258年の間となり、桓帝と霊帝と同じ在位年数であったとすれば、268年～269年のあいだで在位に着いたことになる。したがって、この257年から268年以前に、つまり247年から268年の間に、2度目の倭国争乱が起きていた事が想定できる(尚、後述の年表には247年～257年を採用)。

一方、国内の情報である記紀には倭国争乱が記載されているのであろうか。結論から述べると記紀には「倭国争乱」という記事はない。しかし、記紀のストーリーの中で、この頃日本で2回の争乱があった可能性が指摘できる。

記紀に書かれている第1回目の争乱は、国譲りの交渉とその最後に記載されている建御名方命と武御雷命の2人が争ったという記述である。国譲りそのものは言問いによっていたので平和的な交渉と考えられるが、2人の神は明らかに争っている。最終、建御名方神は、長野県の諏訪湖まで逃れて、ここからはもう出ないと約束をして許されたと書かれている。この地で、今も開催されている「御柱祭り」は、四隅に高い柱を立てる祀りで、「方の儀式」として国津神を象徴している(建御名方神は大国主命と奴奈川姫の子ども)。

この争いが山陰地方の中海周辺から長野県の諏訪湖まで続いたとすると、一定の期間争っていた可能性がある。最初の国譲りの使者から最後の武御雷神まで、都合6人ほどの使者が高天原から言問いに降りてきている。大国主命についてしまい復命しなかった神もいて、正確な年代は算出できないが、一人の神の交渉期間を3年～5年とすれば、18年～30年ほど言問いの期間があり、建御名方命と武御雷神の争いが、5年～10年程度だとすると国譲りの期間は23年～40年ほどの時間が必要となる。前述の魏志倭人伝による第1回目の争乱の期間が36年～37年間であったので、整合性はあると考えられる。

2回目の倭国争乱は、神武東征である。45歳の時、神武天皇は数百隻の船団を従えて山陰地方から大和を目指して出発した。九州・安芸・吉備を経由、難波から大和に入ろうとしたが長脛彦らの抵抗にあって、和歌山県に迂回し東から大和に入っている。

この折り、長脛彦等の土着の神々と戦いをを行っている。したがって、2回目の倭国争乱は、この時のことを表していると考えられる。

記紀にはこの年代は書かれておらず、2回の争乱の時間を特定することは相当難しい問題となるが、いくつかの手がかりを参考に推定を試みたい。

まず、第1回目の倭国争乱が「国譲り」に由来すると考えれば、これは弥生時代の後期に当たることになる。弥生時代は、国津神（大国主命と少彦名命＝徐福の一团）が日本中を歩いて国造りを行った時代で、北海道と沖縄を除く全国に、水稻稲作・漢方医学・金属器（青銅器・鉄器）などの中国のサイエンスとテクノロジーが行き渡った時代である。記紀には、天照大神が、大国主命が国造りを行った後に「この国は元々私たち天津神の国だったので返して欲しい」と国譲りの交渉を始めたと言われていることでも了解できる。

一方考古学的発掘成果では、すでに国宝に指定されている神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が参考になる。なぜなら、記紀には「天津神に国譲りをした結果、国津神である大国主命はそれまでの祀りごとを全てやめて出雲に治まった」と書かれており、風土記には、「昔大国主命が宝を積み置いた場所なので神財の郷と言っていたのを今の人は間違えて神庭の郷と言っている」とのくだりがある。これは、銅矛・銅剣・銅鐸の3つの青銅器を表しており、その埋納場所が荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡の地域であることを指しているのである。

ゆえに、この2つの遺跡は、国譲りの結果、それまでの国津神の祀りごとを止めて青銅器を埋納した場所であったので、その埋納年代が参考となる。現在の発掘調査書によると青銅器群の埋納の年代は、「紀元前後から紀元100年の間」と推定されている。これは、国譲りのあとに起こったことなので、前段で整理したように、国譲りの期間が23年～40年の時間が必要であったと考えれば、紀元前後の埋納なら、紀元前40年から紀元前後までの間に国譲りが行われた可能性が高い。紀元100年の埋納なら紀元60年から100年までの間で国譲りが行われた可能性がある。その最終盤に建御名方命と武御雷神の2人の争いが、5年～10年程度行われたと考えれば、第1の倭国争乱は紀元前後の10年ほどから、紀元100年の10年前後にあったことになる（埋納のタイムラグが大きい）。

次に第2の倭国争乱が、神武東征に関連していると考えれば、その時期はどう特定でき

るであろうか。これも記紀には年代が書かれていないので、推定していくしかない。私はかつて拙書で、微分積分で天皇の年代が計算できるとした。この計算結果、神武天皇は紀元180年前後に誕生したと推定した。記紀には、初代神武天皇は45歳の時に船団を組んで山陰から大和に向かったとされているので、鳥取中部の「高千穂の宮」、もしくは「日向」を出発したのは、紀元225年頃となる。

その後、九州を経て安芸と吉備を経由して難波に入るが、安芸で7年、吉備で8年間逗留している。前後の旅程も考えると、山陰を出発した神武天皇は20年ほどかけて難波に着き、その後数年間の戦闘を行った可能性がある。

したがって、記紀による第2の倭国争乱は、紀元245年以降の数年間に起こったと推定できる。以上、これまでの検証の詳細を年表に示すと以下の様になる。

【倭人伝の情報】

<第1の倭国争乱>

←桓帝 146～167・霊帝 168～189→

182 卑弥呼即位～248 卑弥呼没

<第2の倭国争乱>

← 247年 ～ 257年 →

257 台代即位

【記紀の情報】

<第1の倭国争乱>

←紀元前10 ～ 後110年→

国譲り・建御名方と武御雷の争い

<第2の倭国争乱>

← 245年 ～ 250年 →

神武東遷による争い

第1の倭国争乱の時期には一定のズレがあるが、第2の倭国争乱の時期は非常に良く一致している。このズレの原因は、もっぱら記紀に年代が書かれていないことと、倭人伝が伝聞によって書かれていることによるが、今後もさらに探求を進めて精査をしていきたい。

※（尚、梁書と北史には、第1の倭国争乱の時期が「霊帝の光和の中であった」と

書かれている。つまり紀元178年～184年の間である。本論考では、数百年

間混乱が続いている邪馬台国論争の現状を尊重して、魏志倭人伝を基調とした。）※

②倭国に産する物

魏志倭人伝には、倭国に産するものとして「しょうが・たちばな・さんしょう・みょうが、があるも、以て滋味となすを知らない」と書かれている。この産物や次の項に述べる倭人の風俗などから邪馬台国の位置を探る論考は、位置論の次に多い。

この中で橘は、柑橘類で比較的産地が特定できる。私も当初これらの産物の調査を行っていた。植物学の分野を研究すると古代の柑橘類である橘の産地は四国となっていた。四国南部が第1の候補地であった。すると、四国の南部に邪馬台国があったのだろうか。

答えは否である。多くの論者の間違いは、これらの産物が「倭国に産する物」と書かれ

ている点を考慮していないことにある。結論から言うとこれらの産物や風俗は「倭国」の物であって「邪馬台国」の物ではない。倭国すなわち日本の各地に存在すると書かれているのである。もし、この倭人伝等の記述が「邪馬台国に産する物」と限定的だったら、邪馬台国の位置を特定できたかもしれないが、「倭国に産する物」であるので、邪馬台国を指すことはできないのである。又、「しょうが・さんしょう・みょうが」は特定の産地に絞り込むことは出来ないし、紀元後は橘も天皇の御所に植えられることになり、邪馬台国の傍証にはならない。又、倭人伝には、「倭国は温暖で、夏も冬も、倭人は生野菜を食べている」と書かれている。このことから、邪馬台国は日本の南方で九州南部ではないかとの論考もある。しかし、この論も2つの意味で間違っている。第1は、先に示したように、これは倭人の慣習を語っているもので、邪馬台国の慣習を書いたものではない。第2に、野菜は寒冷地でよくとれ、温暖な気候ではあまり生育しない。沖縄では野菜の栽培は難しい。大根や白菜・ジャガイモなど、現代でもこれらの葉物野菜も根菜類も、温暖な気候より寒冷の気候帯で良く育ち、そういう地域が産地になっている。

植物学や農学の分野から考えれば、豊富に生野菜を食べられるのは、南方よりも比較的北方の地域の方が、蓋然性が高いのである。この様に、十分な科学的研究調査を経ないままに感覚的に判断すると、とんでもない間違いを犯すことになる。

③倭人の風俗

魏志倭人伝には「男子は大小なく皆鯨面分身す」と書かれている。これは水に潜って漁をする時の安全のために、おまじないとして刺青を入れていると理解されている。要するに倭人は「素潜り漁」をしていると書かれているのである。この鯨面分身の分布から、邪馬台国を特定しようという論考も多く見受けられる（海外の研究者も含めて）。

しかし、この論考も前述の生野菜の例に洩れず、2重の意味で間違っている。まずこの風俗も倭国を前提としており邪馬台国の物ではない。また、単純に素潜り漁は暖かい地方で行われていると考え、九州か四国の南部に邪馬台国を比定している例があるが、これも間違いである。素潜り漁は、北陸や東北地方でも行われており、地域の特定にはならない。



淀江歴史民俗資料館の鯨面分身象の展示



次に、鯨面分身の考古学的発掘成果から、西日本の瀬戸内海沿いに、邪馬台国を比定している例もあるが、山陰地方にも鯨面分身の習俗（盾持ち埴輪）があり、これも邪馬台国の特定には至らない。

つまり、これらも十分な科学的研究調査を経ないままで、感覚的に判断するととんでもない間違いを犯す典型的な事例なのである。

←（左は、淀江歴史民俗博物館の鯨面分身象の拡大写真である）

④卑弥呼は鬼道によって国を治める

倭人伝には、「・・・すなわち一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼といい、鬼道に使い良く衆を惑わす・・・」と書かれており、当時はト骨による占いを行って政権の運営をしていたことが分かる。又、古事記には、天皇は「雄鹿の肩甲骨を焼いて吉凶を占った」とト骨を行っていたことが書かれており、情報の整合性がみられる（尚、現在もこれは行われている）。次の図表は、ト骨による占いを行っていた考古学的発掘成果の一覧である。



現状で占いを行ったト骨が一番出土しているのは鳥取県になっている。少なくとも畿内や九州では、卑弥呼の鬼道の痕跡は多く見られない。私は、これをもって山陰に邪馬台国

があったなどと下品なことを言うつもりはないが、倭人伝や記紀に共通する重大な物証が客観的に存在する事実を無視することはできないし、するべきではないのである。

もし研究の必要があって、邪馬台国や卑弥呼や鬼道やト骨のことを話題にするなら、必ず、この考古学的発掘成果の分布図のことを思い出すべきであろう。

⑤邪馬台国は7万戸

倭人伝によると、朝鮮半島の楽浪郡（現北朝鮮）や帯方郡（現韓国）は、数千戸あったと書かれている。1戸に3人住んでいれば1万5千人、5人住んでいれば2万5千人の人口があったことになる。しかし、邪馬台国については7万戸あったと書かれている。1戸に3人住んでいれば21万人、5人住んでいれば35万人の人口があったことになる。

国際的にみれば、紀元前後の最大の都市はアレキサンドリアであり、その人口は30万人を有していたとされる。

記紀が書かれた頃の日本の平安京でも15万人を有していたことを考えれば、邪馬台国の人口は、当時トップであり、世界最大の都市であった可能性がある。

では、世界最大都市の人口を維持できるもっとも根本的な要因はなんであろうか。それは食糧の存在である。つまり文明が発祥する条件は、常時食糧の供給ができて大量の人口が定住できることが前提であることが分かる。出雲の国の風土記には、以下の記述がある。

①朝酌の瀬戸の渡り・・・大小さまざまな魚が時節に応じて群がって・・・風を押し水を突く・・・あるものは網を裂くほどだ。（現矢田の渡し付近）

②邑美の冷水・・・泉がきらめき、流れている。男も女も老人も子どもも、時節ごとに集まって、いつも宴会をする地だ。（現松江市大海崎町にあった泉）

③前原の埼・・・沢山の鳥が時節ごとにやってきては棲む・・・男も女も、時節ごとに群がりあい集い、遊びふけて帰ることを忘れる者もいる。いつも宴会を楽しむ地だ。（現松江市大海崎町の海岸）

中海西沿岸のこの3つの場所は、年中食料が供給できて、自然に市がたって、遊びほうけて帰ることも忘れる場所と記載されている。この原因は、もともと山陰地方は、日本列島の中で北方種と南方種が同時に生息できるたぐいまれな環境を有しており、年中常時食糧を提供できていた場所だからであるが、この記述からも改めて地球上でも稀にみる自然環境を有していることが証明できる。

したがって、少なくとも日本列島の中では、自然採取経済がまだ大きな比重を占めていた時代に、7万戸＝35万人もの人口を有することが可能な圏域は、山陰地方しかなかったと言えるのである。ゆえに、倭人伝と風土記には、整合性があると言える。

⑥邪馬台国、女王国、倭国、30余国、など

倭人伝には、倭国が元々100余国あったなかで、卑弥呼を共立した国を30余国と記載している。具体的には、最初の対馬国から最後の「次に奴国あり女王国の境界の尽くる

ところ」までの国々で、都合29ヶ国が記載されている。一部の研究者によると、邪馬台国までは存在したが、それ以降は数合わせで適当に国名を書いたに過ぎないという極端な意見まである。この原因は、邪馬台国以降は距離の記載がなく、ただ単に国名だけが順次記載されていることによる。しかし、良く倭人伝を読むと、対馬国から不弥国までは中国の距離単位である「里」で表されて、不弥国から邪馬台国までは日本の距離単位である「月日」で表されていることが分かる。もともと、北狄・南蛮・西戎・東夷などの中国周辺の野蛮人が住んでいる地域（中華思想による）の情報は、伝聞が主で正確ではなかった。

倭人伝（東夷伝倭人の条）に至っても伝聞で正確さには欠けるということを陳寿自身が述べている。これが、倭人伝を根拠に日本の古代史の謎を解くことを困難にしている最大の要因である。しかし、前述の論者の様に全てが不正確として簡単に捨て去る必要もない。

私は、「100余国」の表現は、全ての国名は特定できないまでも比較的小さな国々に日本が分かれていたことの表現で、「都市国家群」を表していると考えている。「卑弥呼を共立した国は30余国」は、具体的に29ヶ国を記載しているので、国名だけは分かっていたのであろう。対馬国から不弥国まで距離が記載できたのは、中国の距離単位で国々が特定できていたからである。不弥国から邪馬台国まで日本の距離単位で記載されたのは、中国の距離単位で測量できなかったために、情報として得られていた「倭人の距離単位」を用いたことによる（現在でも日本人は距離を時間で表す）。この原因は、大陸の中国や半島に近い地域では比較的情報の精度が良く、離れるほど情報の精度が落ちていたことが考えられる。現代でも、東京の人が、鳥取県と島根県の位置関係が分からなくても、関東近辺の県のことは良く承知していることや、同じように山陰地方の人が、中国地方や中四国地方のことは良く理解しているが、関東や東北地方のことは良くわからないようにである。

又、伊都国を「常に使者が留まる」と書かれているのは、大陸か半島の出先機関いわゆる大使館か領事館に相当する機関が、九州北部に置かれていた可能性を示唆している。加えて、このことは、不弥国までの距離が特定できていたことの論証となる。

日本の旧国は75国あった。そのうち平安時代に天皇家が統治できていたのは66ヶ国であった。東北地方の国々は蝦夷の国で、まだ天皇の統治下には入っていなかった。このため、平安京の守り神として鎮座した「八坂神社」には、統治できていた66ヶ国の安寧を願って、66の鉾が奉納され、これが後の祇園祭の山車を「鉾」と呼ぶ風習につながっていった。（今、祇園祭の山鉾は43ほどであるが、当初は66あったと伝承されている）

倭人伝の百余国とは、日本の旧国75を指していると私は考えている。紀元前後にすでに日本に「都市国家群」が成立していたと考えれば、旧国の75ヶ国がそれに相当し、日本の歴史の古さが証明される。では、女王国の「30余国」とはなんだろうか。実際に29ヶ国が倭人伝に記載されているところの「30」余国である。

私は、西日本の旧国（九州から兵庫県まで）が、この30余国に該当すると考えている。具体的には、西から、薩摩・大隅・日向・対馬・壱岐・肥後・肥前・豊後・豊前・筑後・筑前・土佐・伊予・讃岐・阿波・周防・長門・安芸・備後・備中・美作・備前・石見・隠

岐・出雲・伯耆・因幡・播磨・淡路・但馬、の30国である。

もともと縄文海進の折り、大阪と京都・滋賀は水没して存在せず、大阪・京都・滋賀の
一帯は、琵琶湖とつながった「海域」になっていた。北部の「若狭」だけで、西日本と東
日本が約1万年間つながっていた。「まだこの国が若国の時、ここが狭くなり東西日本が
つながっていた」ので「若狭」と呼ばれるようになった。京都には「昔京都は海だった」と
いう伝承が残っている。

倭人伝には「女王国の東、海を渡ること千余里にして、又国あり、皆倭種なり」と書か
れている。女王国とは卑弥呼を共立した30余国を示している。この女王国の境界は東で
尽き、又、一海があり、それを渡ると国があり、倭人がたくさん住んでいると記載されて
いるのである。100余国から30余国を引けば70余国である。70近い小国が女王国
の境界にある海を渡った東にたくさん存在し、皆日本人であると書かれているのである。

この倭人伝の情報は、前述の西日本の30国と、その境界の尽きる兵庫より東が海にな
っていて、西日本と東日本が隔たっていた事実と一致している。若干のタイムラグがある
のは、大陸から遠かったことによる情報不足と、伝聞による不正確さではなかったろうか。

記紀の神代の記録には、高天原・黄泉の国・根の堅洲国・葦原の中国の4つの国しか出
てこないが、具体的な地名は、稲葉・伯耆・出雲の3つの旧国名で書かれている。人皇で
ある神武天皇以降の時代は、旧国を単位に話が展開している。伝聞であってもこれらの情
報が遠く中国まで伝わっていたと考えると、倭人伝の情報を簡単に捨て去る必要はない。

総合的で科学的な研究調査さえ行えば、その整合性をはかれる可能性は大いに残されて
いるのである。したがって、倭人伝と日本国内の情報には、実は大きな違いがなく、比較
的よく一致していたとも考えられるのである。

⑦倭人伝ラインと宗像ライン

私は大陸との関係で、倭人には北部九州に「倭人伝ライン」と「宗像ライン」の2つの
認識があったと考えている。「倭人伝ライン」は、朝鮮半島南部から対馬等を経由して、九
州北部に到達するラインである。「宗像ライン」は、3つの宗像神社を結んだラインである。

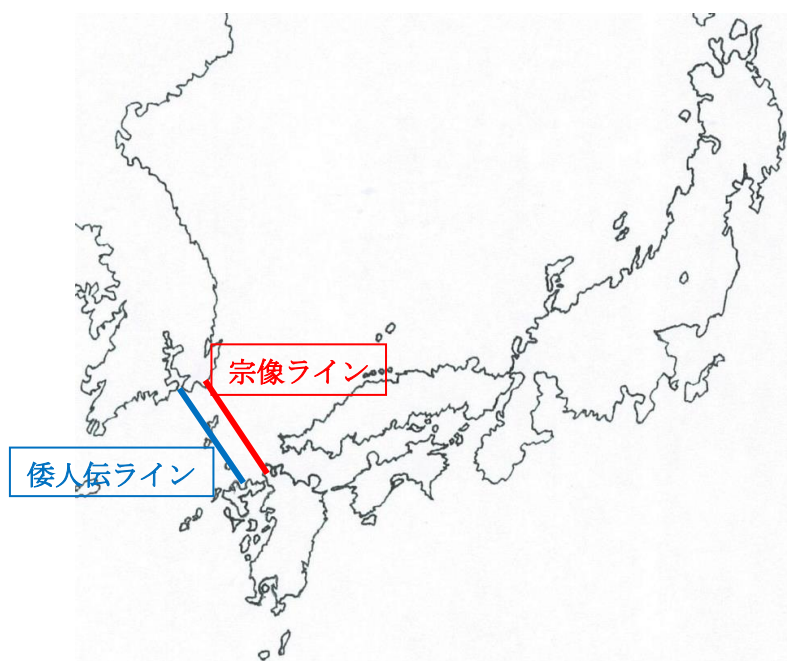
「倭人伝ライン」は、魏志倭人伝に書かれているように、大陸と日本との人的移動の交
通路である。このラインを使って、古来より日本と大陸の交流が行われていた。一方「宗
像ライン」は、記紀に書かれているように「日本と大陸の境界として、宗像3神を置いて
守らせ」たラインである（宗像神社発行の「むなかたさん」にも同じことが書かれている）。

この2つのラインの認識があったことが、古代の日本と大陸の関係を考えるうえで非常
に重要な意味を持つ。

九州北部と大陸もしくは半島とは、相当古い時代から交流の関係があった。倭人伝をも
とに検証すると、前述した伊都国に常時使節が滞在していたことや、九州北部の国々間の
距離を中国の単位で表現できたこと。考古学的発掘成果からは、北部九州の墓制が朝鮮半
島の墓制と同じ「支石墓」になっていること、青谷上寺地遺跡の「卜骨」と同じものが朝

鮮半島南部でも出土すること、などである。したがって、北部九州は大陸との緩衝地帯になっていたのではないかと考えられる。別な表現を借りれば、日本であって日本ではないような場所だったと言えるのである。このことに対応する形で「宗像ライン」が存在する。

大和朝廷は、日本と大陸の境界として「宗像ライン」を認識しており、それは高天原の時代からの判断である。なぜなら、宗像3神は天照大神と素戔鳴尊の誓いによって誕生したことになるからである。したがって、こちらも相当古い時代から、認識されていたことになる。なぜ、大和朝廷は、「倭人伝ライン」を日本と大陸の境界として認識せずに「宗像ライン」としたのだろうか。なぜ、宗像3神を「倭人伝ライン」に置かなかっただろうか。それは、古来から（縄文時代より以前か？）大陸と九州北部の関係が、「大陸と



< 2つのラインの図 >

の緩衝地帯」であったり、「日本であって日本ではないような場所」であったりしたので、「境界ライン」と認識されず、少し東に退いた「宗像ライン」を採用したのではないか。

宗像ラインより東は、日本の領域であり、このラインを守るように、宗像3神は置かれたことになる。

このように、「倭人伝ライン」と「宗像ライン」の2つの認識が、相当古い時代より倭人によって理解されていたことが、日本の古代を考えるうえで、重要な基礎的前提となるであろう。

4、おわりに

今論考は、記紀・風土記と魏志倭人伝・史記等の関連性を検討し、その整合性をはかることを目標にまとめた。今回整理した7つの論点以外にも、まだまだ多くの論点が存在するであろう。大局的で科学的な立場に立って、引き続き検証を深めていきたい。

元医療放射線防護研究専門委員会研究員（東京大学医学部&物理学部）、元厚生省健康政策研究事業医療放射線防護の研究班研究員、安斎平和・科学研究所客員研究員（放射線被曝解析）、島根県立大学北東アジア地域研究センター市民研究員、元全国邪馬台国連絡協議会副会長（中四国支部長）、古代史・神話ネットワーク代表幹事、山陰精神／心理・薬理研究会幹事、山陰古代史研究会代表、古代史研究家、田中文也